

# 日本基督教会と朝鮮

——一八九二年から一九二〇年まで——

池 明 観

はじめに

この小論は一九七五年から二年間、東京女子大学比較文化研究所の総合研究、「日韓教会関係史」資料収集のプロジェクトに参加した結果の一部をまとめたものである。この研究は、日韓教会の関係が始まる一九世紀から、一九一九年の三・一独立運動の頃にまで及んでいた。そのためにこの小論においても日韓教会関係史の初期とも言うべきこの時期を対象にしようと思う。

この研究において、私が特に資料の収集と検討に当たったのは日本基督教会（以下略して日基と書く）関係の『福音新報』であった。そこでこの小論では『福音新報』に現れた対朝鮮関係の論説と記事に範囲を限って問題を客観的事実中心に追求して行きたい。それは『福音新報』の性

日本基督教会と朝鮮

格からして独立伝道を標榜した植村正久の姿勢を中心とする研究になるであろう。それ以上に範囲を広げることは今後の研究に譲りたい。

教会がそのおかれている国家的限界を越えて交りあおうとする場合には、意識的、無意識的にその福音理解を前提とする。特に異国に対する宣教を教会的課題として取り上げる場合には、その福音理解は表面化せざるをえない。何を伝えどのような実りを上げようとするのか——このような反省は宣教につきまとうものである。それと同時にそのような実りを計画するためには、その福音が伝えられるべき地域、宣教風土に対する理解が先行しなければならない。その理解の上に宣教意図が成立するであろう。

『福音新報』（以下略して『新報』と書く。『福音新報』からの引用は記事が記載されている『新報』の発行日付のみを記す）の前身、『教

『会新報』に朝鮮のキリスト教との関係で最初の記事が現れるのは、一八八三年七月一七日であったと思われる。それは「北英聖書会社」の長坂毅が聖書売捌支店を朝鮮に設立するために、七月一三日神戸を出航して馬関に向って出発したという記事である。そのつぎの七月二四日の記事にはつぎのように記されている。

朝鮮伝道 前号に朝鮮行の事と記せしが尙聞所によれば北英聖書会社にては既に四福音書を彼の邦語に訳されたれば長坂氏には是らと共に聖書と他の書類を携さへ朝鮮の景情を探り傍ら伝道の端緒を開かんが為に釜山元山仁川の三箇所を過らるる積りの由四方の兄弟姉妹朝鮮の為に祈りたまへ（『教会新報』明治一六・七・二四）

八月一五日、元山から送って来た「長坂氏朝鮮行の記」は土俗民情などかなり客観的に報告している。たとえば風俗についても「婦女子の仮令病に罹ると雖も医士の診察を受ける事なく男子代て容体を述べ葉を受ると云ふ父母兄弟の間特に本朝人より優ること数等又賓客に接する頗る懇切に似たり」（『教会新報』明治一六・九・一一）と記している。長坂のこの旅行が、朝鮮の現状について何んら政治的意図なしに客観的な観察をなした伝道旅行であったことは、その後の多くの人々の旅行に比べて興味あることであると言わねばなるまい。

一例として、一八九二年の夏、朝鮮伝道視察のために朝鮮に赴いた島貫兵太夫の報告をあげることができよう。彼の目に映った朝鮮は全く否定的なものであった。その第一信から数節を引用して見たい。

日本居留地だけはドウカコウカ不潔ならざるも朝鮮居民の家屋は実に不潔々々。其時生を刺戟せしは萬事の不潔其一なり怠惰其二なり貧賤其三なり飲酒その其四なり…至る處腰打ち掛けて悠々然として空を眺めつゝあるを見る。至る處実に不潔なる白酒屋あり四五の民人皆土にドッサリ腰を据えて或は喧嘩しながら飲酒するあり実に恐ろしい有様に御座候……（明治二五・七・二二）

ここにおいて朝鮮人は「神上靈魂上」救い難い状態であり、「実に下劣野卑なるが如し」で、「日本人に実に慘酷に虐使せらるゝも唯々として従ふが如し」であり、「鼻を曲げて息をつけと云ふ様な有様」と観察されたのであった（明治二五・七・二二）。このような目から島貫は、朝鮮において「父母の喪に泣く」のも「誠心より痛悲の情溢れ出で、涙になる」ではなく、「三年泣き続ける時」は「孝子なる表牌を其門柱につけることができるからであると書いた。朝鮮人は国を思う心なく、己を思う心のみであり「家を齊ふよりも慾情を恣にせんと思ふのみ」（明治二五・一〇・一四）であるというのであった。そしてついには京

城に「その容貌の少しく美なるもの」があるのは、男色を売っている人々であるとも書いた（明治二五・一〇・二一）。

一体このような朝鮮人観において、日本のキリスト教はいかなる朝鮮伝道論を展開しえたであろうか。また日清戦争前夜というべきこの頃、なぜこのようなアジア人観が成立したのであるか。このような問いを秘めながら、まず日本のキリスト教の中に急激にアジア伝道論、朝鮮伝道論が提起された、日清戦争前後のことがらを考察して見たい。

#### 一八九四年前後の朝鮮伝道論

『福音新報』の前身、『福音週報』に現れた海外伝道を鼓吹する最初の積極的な論説は、一八九〇年T・Kの名前で発表された「殖民と基督教」（明治二三・一二・二六）であったと思われる。それは日本の開国と近代化によって日本人が「心ならずも弾丸の一孤島に齟齬」していた状態から、「豪志英気」を懷くようになったことを指摘する。そして「政界に駆馳せる男子、法律に熱心せる男子、藩閥攻撃を得意としたる男子」は「其の胸裡に鬱勃せる光焰を吐かんとする」ためには植民移住の道を選ぶべきであると強調する。

このように「殖民地將に海外に開けん」とする時に、日本のキリスト教は「靈魂の糧」を与えることを仏教にだけ委せてはいけないというのである。そこでその伝道は当然二つの方向を取るべきであった。その一

つは植民によってややもすれば頽廢しがちである日本人移民に宗教を伝えて「彼等の放恣を抑え、品を正す」ことで「徳義地を掃って、禽獸と其の伍を同ふ」することのないようにすることであった。もう一つは原住民への伝道であった。日本のキリスト教にとって植民が始まるとともにこの二つの課題をいかに関連せしめるかということが宣教的問題であった。しかしまだその時は、植民移住が本格的に開けていないので、それは伝道に対する準備を訴えるというのに過ぎなかった。しかし「亜細亜全地の伝道は吾儕日本基督教徒の天職として奮然自ら任ずべきもの」というのがこの論説の結論であった。

この論説がすでに日本キリスト教の初期における朝鮮伝道論、アジア伝道論の背景を説明してくれて余りあると言えるのではなからうか。それは日本の大陸進出を肯定しそれを鼓吹しながら、その中におけるキリスト教の協力的役割を強調する立場で朝鮮伝道、アジア伝道を考えたものであった。上に述べた島貫は同じような文脈で朝鮮伝道を論じ、その冒頭においてつぎのように書いた。

我、大日本は、東洋の盟主なり。東洋の先導者なり。宗教に於て、政治に於て教育に於て技藝に於て、其他百般の事。東洋諸国に冠なり。我等は今、東洋傳道策と講ずるの責任を有せり。我等は東洋諸国を傳道するの天職を有せり我之れを信すること久し（明治二五・一〇・一四）。

島貫は日本の東洋の盟主であること、朝鮮伝道の責任を担っていることに傍点をつけて強調し、その確信がますます強まって行くと告白している。島貫はこのような立場に立って朝鮮伝道開始のために尽力した。

そこで彼の建議はよって宮城中会は「朝鮮を以て伝道地と為さんこと」を一八九二年九月二七日に決議してその年の十一月、日基大会に提出することにした（明治二五・九・三〇）。しかしこの時の朝鮮伝道はまず在朝鮮日本人への伝道を意味したものである。実際島貫は十一月の日基大会に仙台中会撰出代員として出席し、「在韓日本人に伝道する」建議をした。この時、宮城中会は「朝鮮国有望の青年を撰拔し之を東山、東北、明治の三学院に入学せしめ、卒業の後彼地の傳道に従事せしむるの建議」を提出した。そしてこの両案は大会伝道局員に委任されることになった（明治二五・一一・一八）。

日基の朝鮮伝道論が急に活気を帯びるようになったのは、一八九四年日清戦争が勃発したのを契機としてであった。そこで朝鮮伝道論は日本キリスト教の日清戦争観と深くかかわるようになった。戦争が起った直後、植村正久は『新報』の巻頭の論説において、戦争が「如何ばかり国民の志気を振張るものぞ」と「日本の海陸の兵が外国に戦ふ一事」を喜んだ。そして日本は「自家の天職」として「隣邦朝鮮の改革に注意」しなければならないと書いた（明治二七・八・一〇）。このような文脈

において日本のキリスト教徒がなすべきことは「東洋諸国靈性の開拓」であると思った。そして日本のキリスト者が「東洋全体の教化」という天職に余り目ざめていないことを彼は慨嘆した（明治二七・八・一〇）。

日清戦争に対する日本キリスト教の協力は目ざましいものであった。教会の願いもこの事変が「日本帝国の光栄を増し、将来に大関係ある履歴を作り、大いに世界の文明に與力する端を開くに」（明治二七・八・一七）至ることにあった。このような願望から日清戦争を肯定するためまず文明論が動員された。それは「清国の勢力朝鮮に盛んなるは独り朝鮮の不幸なるのみならず亜細亜の不幸なり」という論理であった。もしも清の勢力が支配すればアジアは開化文明への道を歩むことができない。それは暗黒が続くことを意味し、日本の「勞力を高麗半島に張るは人類の進歩の大利を與ふる」ことになるのである。このためにこの戦争における「日本の地位は天道の法庭に於て少しも怖るべき所また疚しき所なしと云はざるべからず」と宣言することができた。このように「天道に照らして是認する」に及んで日本人は、この戦争に対して「倫理的勇気を鼓舞し、高貴なる精神を喚発し、堂々として事に従ふこと」になるというのであった（明治二七・八・一七）。

ここに日清戦争は義戦であるという論理が成立したのであった。この義戦論はキリスト教信仰によって支えられなければならなかった。その一例として坂本直寛の例をあげて見よう。彼はキリストは平和である

が、「基督教の所謂平和—真正の平和を来らせんには屢々姑息の平和を譲らざる」をえないというのであった。「神の平和を地に来らせんには先づ悪魔の工を毀たさるべきからす」というのである。そのために聖書の「地上に平和をもたらずために、わたしがきたと思うな。平和ではなく、つるぎを投げ込むためにきたのである」（マタイ一〇章三四節）ということばが援用されたのであった。そして「汝の隣を愛せよ」などはこの義戦にもっとも当てはまる御言葉であった。それは「朝鮮の小弱を憫み其政府を助て内政を改革し以て独立の躰面を彼に保たせんとて将来東亜の平和を鞏固にせんとて彼を助くるのみ」であったからであった。これはその国に「難を来らせて彼ら千古の迷夢を一堂せしめ奴隸心を一洗せしめて独立自治の氣力を起さしむる」義戦である。そこで日本のキリスト者はこの事件が「他日彼らをして神に導くの階梯となるべき事」を目ざさねばならないというのであった（明治二七・八・三一）。

このような義戦論の枠組の中で、日基では少くとも植村正久を始め優れたキリスト者たちの間では、常に倫理的な要請が提起された。植村は日本人の大陸植民はすすめられるべきであると思ったが、植民による精神の頽廢、それによる植民の失敗を恐れたのであった。それで大陸進出肯定の上に立った、日本キリスト教の道德的警告が続けられた。日清戦争においても憂うべきことはつぎのような事態であった。

吾が邦人朝鮮に在りて、人類の尊貴を無視し、隣国の民を輕んじて、暴戾不遜の挙動あらんには、設令兵馬の勝利盛大ならんとするも、精神上の失敗は此の上無かるべく、日本人民は朝鮮に於て教育伝道其の他諸般の開道的事業に付きては無能力の有様に陥らざるを得ず。日清の變亂は決して炮烟彈雨のみの戦ひに非ず。或る重要な意味に於て道德の戦争なり（明治二七・九・一四）。

このような道德論議は日清戦争を義戦と解釈し、文明論的な意味づけをしようとした、キリスト者としては当然の問題提起であった。その後には西洋文明はキリスト教文明であり、開化はキリスト教化することであり、それこそ精神的革命を意味するものであると思うナイヴな発想がひそんでいた。日清戦争によって朝鮮に強要された改革という名に於ける「日本化」は、「実に基督教的文明の精神より割り出し来れる主義を土台」にしたものに見えた。そこではそれに抵抗する朝鮮国民のナシヨナリズムが目に見えるはずがなかった。そのような抵抗は「新文明の光暉」に反対することであり、「基督教精神」に抵抗するものであるとさえ考えようとした（明治二七・九・二八）。

このような素朴で樂觀的なキリスト教的啓蒙主義の上に立った道義論であったために、彼らには、日清戦争という契機は「東洋の精神的大革命」の時期であり、日本国内においても「精神的革命」が行われるべき

時期であると考えられた。しかもその精神的革命は日本が「基督教を容るるや否の問題」であるというのであった（明治二七・一〇・五）。そしてこれこそ第二の維新であると把握したのであった。第一の維新は護国の必要によったものであり第二の維新は「外国に向って運動せんとする」ものである。今や大陸進出の期であるとともに、キリスト教的啓蒙主義と一致する精神的革命の時代である。第一の維新から三〇年をへた歴史がそのような時代を出現させたという（明治二七・九・七）。日本のキリスト者はこの第二維新に使命を感じなければならないというのであった。

実際日清戦争に対するこのような論理は、何よりも明治のキリスト者を支配したナシヨナリズムによるものであると解釈してよいであろう。彼らはナシヨナリスティック・クリスチャンとも言えるべきであるが、しばしばクリスチャン・ナシヨナリストと言うべき強力な愛国主義の所有者であったと思われる。『新報』は、少くとも日清戦争の時期においては、そのような姿勢に貫かれている。「天長節」を祝う論説の中には「陛下の武威」が「日清戦争に由りて朝鮮支那の海陸」に輝いたことを賛美し、ひたすら「聖徳を感載」している。そしてつぎのように結んでいる。

天皇陛下聖寿長遠なれ。御治世は高貴なる光を以て充ちよ。偉なるか

な万世一系の帝統。美なるかなその知食す此の瑞穂の国。ああ聖名を崇めさせたまへ、聖旨の天に成る如く地にも成させたまへ、聖国を来らせたまへ。アアメン又アアメン。

このような論説は「吾ら基督教徒は時に世の頑冥の徒に困めらるること無きに非ず又た種々の方面に於て幾分か動作を抑へらるるの感あるを免かれず」と消極的な表現ではあるが、キリスト者が日本において少数者として味った運命と決して無関係ではないであろう。そのために「信教自由の大義炳として帝国の憲法に掲げられ、静かに上帝に事ふることを得たり」また「陛下の御治世に於ける基督教伝播の一事は後世日本の史上に燦爛たる光輝を放つべきものたること疑ふべからざるなり」と書かねばならなかったであろう（明治二七・一一・二）。それでは日清戦争に対する義戦論、新文明、即ちキリスト教文明あるいはキリスト教受容であると主張した論議も、多分に日本のキリスト者たちが少数者としての運命の中で編み出した生存の論理であるという一面を持っていたのかも知れない。そこでそのような主張はやもすれば日本社会の要求をキリスト教において反映するものに過ぎなかった。

また日清戦争が「新時代の新文明と、錆び腐れた東洋の旧精神との戦争」であるという論理が、日本の国内においてのみ通用したのではなく、その当時の帝国主義的時代を象徴するようかなり普遍的な論理で

あったことも注目していいであろう。いわば世界の帝国主義によって日本の自己拡張主義が一層是認されたのであった。植村正久は自分に宛てられた、かつて日本で宣教師として働いた、ジョージ・ウィリヤム・ノックスの書信（明治二七・一一・九）を『新報』に翻訳掲載している。この書信においてノックスはアメリカの輿論がこぞって日本に同情し「日本最負」になっていることを述べ、「日本の勝利は自然米人に感動を與へ、過去廿五年間の進歩の大なりしことを悟らしめ候」と言っている。ノックスは日本と支那がともに最善の結果を得ることを望みそれは、「支那は頑僻、空威張にして且隣邦を侮辱致すことの無益なるを」悟りその領土を保全しうること、日本は「全勝後に於けるその徳性と智慧との試み」に打ち勝つことであると言っているのであった。いわばそこに日本キリスト教の使命があるわけであった。これは日本のキリスト者の日清戦争観が、ほかの帝国主義諸国のキリスト者から孤立したものでなかったことを示して余りあると言えよう。

しかしこの頃朝鮮伝道は、その論議はかなり盛んであっても、在朝鮮日本人の間にすら実際的にはほとんど及んでいなかった。伝道者が朝鮮に渡るとしてもそれは、日本軍内のキリスト者を訪ねて慰問したり在朝鮮外国人宣教師を訪問する程度のことであった（明治二七・一一・一六）。一八九五年の春には日本人数名が在京城日本人基督教徒懇談会を組織したことが報じられている（明治二八・四・一九）。

#### 一九〇四年前後の朝鮮伝道論

日清戦争後になると日基の朝鮮伝道はその論議さえ、薄れて来た。それを皮肉って『新報』には朝鮮伝道を討議した大会を傍聴した「組合教会の某氏」の狂歌が引用されている。「オヨシナサイナ朝鮮伝道チヨセニイケナイコトジャモノ」（明治二九・四・一七）という狂歌である。日基において具体的に朝鮮伝道論が再燃するのは、日露戦争に向けて時局が急転して行く頃であった。一九〇三年の日基大会において植村正久は「明年時機を見計ひ朝鮮に伝道する事」（明治三六・一〇・一五）という決議案を伝道局に提出して決議させている。

しかしそれは日露戦争の前夜における、日本の朝鮮支配という政治的目標と決して分離されるべきものではなかったと思われる。この決議を積極的にすすめた貴山幸次郎日基常置委員はその年の十一月、直ちに朝鮮に伝道視察を試みた。その「朝鮮見聞録」（明治三六・一二・一七）は彼の朝鮮伝道論の動機をうかがわせるのに十分である。朝鮮の山河はたとえ「禿山荒涼」であってもそのまま放任しておくには甚だ惜しいもので「尚は一千万の人を容るべき余地」がある。それに土地氣候風俗も相似て「移住殖民」にもっとも適切である。彼が見た朝鮮人は「豕小屋の様な憐れな家」に住んで、白衣に冠と長煙管という「神武天皇様時代の様な風装」をした「目は半ば死んで居る」「元氣希望」も「自任の

志」もない人々であった。そして「朝鮮を亡ぼすもの三つ」をつぎのよう

に指摘した。

京城学堂長渡瀬常吉君曰く、韓人に一番困ったものは早婚の弊だと大抵の人は云ふが、自分は夫れよりも恐るべき悪ひものは、男子の頭を余り強く馬の毛にて縛ることだと思ふと実に然らん、此悪習のために胸の働を痴鈍にし、記憶力を失ひ、自から馬鹿の様になるの弊は、恐るべきことだろふ、併し予は此上に更に彼の長煙管を加へえ亡国の三つの道具に入れんと思ふ……

「馬の毛にて縛る」とは冠を固定するために馬の毛で編まれた綱巾（マシ）をつけることを言うのであろう。それは頭をきつく縛るものでもなければ「胸の働を痴鈍」にするものでもない。しかし彼らはそこに「新天地新日本」を開くのに好条件を見出したのであろう。そして「由来移住殖民膨張発展は、アブラハム以来我僑信徒の一大特色」であるからクリスチャンは大移住をしなければならないと言う。それは「日本の為であり、又朝鮮の為である。ソシテ東洋文明の為めとなるのである、即ち是れ神の榮のために神の子の大に勉むべき」ことであるという結論であった。この甚だしく飛躍した発想の枠組において朝鮮伝道が論じられたのはむしろ驚くべきことである。日露の風雲が急に迫まれば迫まるほどこ

のようなキリスト教的殖民主義が論じられたものである。それはいわゆる「韓人の精神をして根本的に更新ならしむること」と「我邦の實地的勢力を扶植すること」のために、カトリックの「耶蘇会徒派が南米に於て經營」（明治三七・一・七）したようになすべきことであるというのであった。それは韓人の精神を更新させるという名分と日本の勢力を扶植するという実質が、奇妙にも結びあつた伝道論であつた。それはその根底において他を差別し、民族中心主義を貫こうとするものであつた。

このような朝鮮伝道論であるがために、それが日露戦争肯定論、ひいては日韓保護条約支持のキリスト者陣営によってほとんど占有された形になつたことは皮肉なことであつた。日露戦争における主戦論のキリスト者たちは、日清戦争義戦論の延長線上に立つて日露戦争肯定論を展開した。

小崎弘道によれば日露戦争のような苦難は「イスラエルの人民が曠野に於て神の訓練」を受けたように、日本が世界の文明国になるための「試練」であつた。そして彼は「或る米國新聞」を上げて、露國は専制政治の國であり、日本は「アングロサクソンの文明」に學んで「立憲政治」の下で、「國民に政治、信教、思想の自由を與へて居る」と説明した。その意味で日本國民の「精神と態度は基督教的」であると言うのであつた（明治三七・三・一〇）。そして戦勝後の日本を予想しては「朝



鮮支那の改革」を主張し、そのために軍備増強による「国力の養成」を求め、道徳上「大覚醒」することを促がした（明治三七・六・二）。

坂本直寛は「二千幾百歳の長年月」「厳然として国体を維持し」「維新の革命」日清戦争、日露戦争へと進む日本の歴史の中で、神の摂理を瞑想した。そして歴史上「公義は屢々東より起さるる」として、日本もまた「同じく東より起りて義戦を開始せる」ものにして、「韓の弱を扶て之を保護せん」とすることは「クリストの救の道が此義戦」によつて清韓に伝わろうしていることであると書いた。そこでこのクリストの道を妨げるのが、露国であると説いたのであった（明治三七・三・二四）。このような義戦論の人々はあえて「我國民は東洋に於ける神の撰民たる光榮を荷へり」とまで言った。そして等しく「淫靡風をなし輕薄俗をなし、詐偽横行せる國民的氣習」に対して、道義的に憂えるのであった（明治三七・三・三一）。そこにおけるクリスト教は日本の自己拡張主義に対して僅か道義的粉飾をするに過ぎなかった。これに対して、『新報』において、少数者の主張ともいふべき日露戦争反対の反戦論をかいま見ることができるのは興味あることである。野語という短いエッセイは「左様さ、戦争、戦争って逆上だつて後の事を考へる人がないんだからな、骨髄の上に勲章飾つたつて仕様がなしさ」という言葉で結ばれている（明治三七・二・二五）。このような戦争に対する批判的な目は当然、戦争の狂気に対する反感ともなった。このような立場の人々

は、戦争熱によつて商を顧みなかった例や戦争ごつてでロシア側に立った子どもを打ち殺した例をあげたりして、剣火の中で一体どのような伝道が可能であるのかと問うている（明治三七・三・一七）。

こういった反戦論が「歴史童話」にかこつけてまで主張された。それはささやかながらも諷喻的な表現によつてメッセージを伝えようとした努力であった。「小兒の十字軍」（明治三七・三・一〇、一七）という物語は十字軍を借りて、聖戦であるという戦争がいかに多くの「破落漢」が参加した戦いであり、「敵を討つよりも味方を苦しめる」戦争であったかを説いた。そしてその戦争の中で純真な、神のために参加した小兒らが、悲しくも「異教徒の奴隸に」売られてしまったというのである。このような反戦論は紅緑の反戦詩において絶頂に達した感がある。「号外」という詩の最後の一節はつぎのようなものである。

『号外／ 号外／ 大勝利の号外／』

勇ましき喜の声は万歳と叫ぶ。

此聲は三歳にして孤兒となり。二十歳にして寡となり。

八十歳にして鰥やもめとなるものを生ず。

嗚呼／如何に残酷なる声よ／

反戦論についてはもう一つ田川大吉郎の演説を紹介しなければならな

い。それは国家が幼稚な時代には武力を用いて「野蛮的な戦争」を試みるが、成年の時期になれば智力を競い、老成すれば「道徳的、倫理的に一変する」という歴史認識に立つものであった。今、日本はその「海陸軍の偉大なる技倆」は誇っているが「国民の品性や道徳」「智識や芸術」については誇るべきものがない。そこでキリスト者は敵愾心を煽動せずに「東洋の天地が戦雲に蔽はれても、国民の精神が殺気に充たされても」「悠々として絶えず平和の事業に従事」しなければならないというのである。田川はこの演説において「古来我国の文物は悉く之を清韓若くは欧米の諸国に仰いで居る」ことも指摘した（明治三七・三・一〇）。

このように日露戦争に対してはキリスト者の間においても、「主戦論者」と「非戦論者」が生まれた。『新報』にはその反戦論に対する教会内の論駁もかなり広く紹介されている。非戦論者は戦争前とその初期において強かったが、実際戦争が進展するにつれて国民の間に惨状が広がり、軍人家族の援護などに協力して行ったものである。しかしこの時点において主戦論者と非戦論者の対立が生まれたことは、日本の教会史において重要な意味を持っているであろう。それは政治体制への態度における相異をはらんでいるものである。日本の政治体制が硬化すれば非戦論者たちは挫折か沈黙を強要されるであろう。その声が沈黙すれば、教会は主戦論的姿勢に支配されるようになるであろう。

非戦論者たちのアジア観または朝鮮伝道論に対する考えは『新報』にほとんど現われていない。朝鮮伝道論が主戦論者たちによって占有されている限り、非戦論者たちの発想の中から朝鮮伝道論は脱落せざるをえなかったであろう。意識的な人々は時代をわきまえない単なる親善、単なる伝道は反親善、反伝道に陥ることを見抜いていたと言えよう。日露戦争の戦場において伝道することなどは、彼らの反対するところであった。「剣火の間に伝道して果してドンナ伝道が出来るであろうか」（明治三七・三・一七）という姿勢から、彼らは当然朝鮮伝道に対しても否定的になったであろうと推測するのはそれ程難しくはあるまい。田川大吉郎の演説の中では古来文物が清韓から導入されたことが強調されている。これはすでに大陸進出論者たちのアジア観とは異なるものを前提にしていることを示しているものと見られる。この意味において日露反戦という教会の少数者の声が、この時点において朝鮮伝道に対して沈黙したことは意味あることであつたといふべきである。

このような状況において朝鮮伝道論者であつた植村正久が、日露開戦になると主戦論者の主張とともに多くの平和主義者たちの意見を紹介したことは興味深いことである。日露戦争を数日前にしてT・TOMの筆名で書かれた、植村正久の「日露問題の精神的影響」（明治三七・二・一一）という論説は、明治期の一人のナショナルスティック・クリスチャンとしての彼の「懊悩呻吟」で満ちている。彼もそれまで「所謂民族

的帝國主義」(明治三七・六・二)などの用語を使って大陸進出を謳歌したように思われる。そして彼は日露戦争に対しても、信仰的に、国家的に何かの意味づけをなそうとして苦悩した。しかしそれは日清戦争義戦論のようなナイヴな樂觀論に立つことのできるようなものではなかった。それは何よりも日清戦争義戦論の否定またはそれに対する自己反省の上に立たざるをえないものであった。

十年前我国が清国と事を構ふるや、国民は恰も夢の中に歩む者の如く、將た酒に酔へる者の如くして彼に立ち向ひたりき。我の地位実力を自覺せるものありしに非ず、單に『日清の条約談判破裂して』という俗謡に現はれ居りし如き敵愾心に刺激せられ、『膺てや懲せや清国を』の童謡に代表せられし如き野勇に乘じ、所謂暗中に一飛躍を試みたるものにして、国民の復讐の精神と好戦の性癖とを満足せしめんために起りし如く見えたりしなり。

植村は反戦論を唱えるのではなかった。ただ今度は国民が自他の実力を自覺し、戦争のつらい代価のことも知っていても、「全く虚托ならざる意味に於て国家の自衛のため、東洋平和の確立のために外ならざるを意識するに由て」戦うのであると書いた。しかし植村は旅順開城になって日本国民が戦勝に酔っている時、「お祭り騒ぎに狂奔する国民は然る所

に氣も付かぬで有ろうが、深く考えて見ると国民は牧ふもの無き羊の状態である」と嘆いた。「旅順の戦に夫を失った婦人が御良人様には今回名譽の戦死を遂げられて云々と来る人毎に慰められるので、心の中は益泣くばかりである」とも言った。もはや彼の関心は日本の大陸進出ではなく「日本は戦勝の結果として其の理想が高尙になるか、將た墮落して物質的の傾向益甚しく、上下挙って鄙野なる傾向に驅られは為まいか」というのにあった(明治三八・一・一二)。いわばこれが今後彼が予言者的見張り人として注目しなければならないことであつた。彼は主戦論と非戦論のはざまにてこれが福音的な姿勢であり、ナシヨナリスティック・クリスチャンとして日本国に仕える道であると思つたのである。それは日本国家の政治的方向は問わないが、道義的問題は良心的に問うて行くということであつた。これが一九一〇年前後の朝鮮問題に対する彼の姿勢にも反映されたものとして解釈されよう。

日基がそれまでの伝道視察旅行程度の接触を越えて、実際に朝鮮に教職者を派遣して伝道を始めたのは、一九〇五年であつた。その年の末、伝道局幹事貴山幸次郎を送つて視察させた後、二月一日に秋元茂雄を釜山に送った。しかし間もなく秋元が帰国したために和田方行がこれに代つた(明治三八・一・二)。しかしその伝道は朝鮮<sup>(2)</sup>という名はついていても、三三、〇八四人と報告されている在朝鮮日本人に向けての伝道に過ぎなかつた。しかし日基は朝鮮人への伝道を決してほうきして

はいなかった。日基の意図は国内におけるように自力で伝道することにあつて、まず在朝鮮日本人の間で伝道を始め、そこを基地として朝鮮人伝道を試みようとするものであつた。<sup>(3)</sup>この方針が何よりも組合教会の朝鮮伝道と異なるものであつたと言えるであらう。

### 一九一〇年以後の対朝鮮関係

日露戦争の勝利、日韓保護条約の締結（一九〇五年一月）によって日本の朝鮮における支配は確立した。しかしこのような政治的変化が直ちに朝鮮伝道の好機であるとは思わなかったのが、日基の立場であつたようである。一九〇六年五月、福音同盟会が催された時にも、満韓伝道は議題にも上らなかつた。それは各教派が合同で伝道事業をなしうる余力がないからであると『新報』はこの決議を支持している（明治三九・五・一〇）。日基はその前年始めたばかりの在朝鮮日本人伝道を着実に続けて行こうとした。一九〇七年の日基大会は満韓の伝道に七千円を投ずる決議をした（明治四〇・一〇・一七）。日韓併合近く一九〇九年頃からは植村正久もたびたび朝鮮伝道旅行にのぼっている。一九一二年にはソウルに、一九一四年には釜山に日基の教会が落成した（明治四五・七・四、大正三・一・二二）。一九一六年現在、日基は新義州、木浦、釜山、大邱、群山、龍山、京城に教会を置き、礼拝出席会員三〇〇余名、多数の日曜学校の生徒を数えていることを報告している。その中で

京城の教会がもっとも盛んで「礼拝は一一三名、少き時も八十名を下らず」と報告された。<sup>(4)</sup>そして日基、メソヂスト、組合の三教会連合の「朝鮮協同伝道」の計画なども立てられた（大正五・八・一〇）。

それでは日基はどのような在朝鮮日本人伝道という課題の中で、どれだけ実際に朝鮮人伝道へとその手を伸ばしたであらうか。そして在朝鮮日本人教会の存在が朝鮮のキリスト者にとって何か意味があつたのであるか。

日基にとつても、一九一九年の三・一独立運動以後になつてすら朝鮮人伝道は忘れることのできない夢であつたように見える。いわば「内地人にて鮮語に熟達し直接鮮人に伝道するの道」が開かれることを思い、また「基督者の学校教師にして朝鮮の教育事業に献身する人々」が起ってくることに對する念願は、捨てることのできないものであつた（大正一〇・六・二三）。しかし実際においては対朝鮮人伝道は、ほとんど実りを上げることができなかった。僅かに路傍伝道に多少の朝鮮人を動員できたとか（明治四三・五・五）、日本人の家庭集合に一〇人の朝鮮人を招いたとか（明治四三・七・二八）、日本人教会の牧師が朝鮮人教会で説教するようになったということ（明治四五・四・一八）くらいであつた。植村正久もその伝道旅行において、朝鮮人教会との交流を行った（大正七・一二・一二）。特異な報告として注目されるのは、一九一六年、京城の日基教会においてクリスマスの時の受洗者一七人の中

に、朝鮮人四人が含まれているという報告である（大正六・二・一五）。このようなことからして、たとえ実りは少なかったと言っても、日基の在朝鮮日本人教会はその教会を基地として、朝鮮人教会とかなり積極的に交わり、対朝鮮人伝道を試みようとしたと考えるべきであろう。

このような姿勢の中で、日基は組合教会の朝鮮伝道に対しては、相当批判的であったように思われる。組合教会は日韓併合が宣布される数ヶ月前、一九一〇年四月海老名弾正と渡瀬常吉を朝鮮に送って組合教会拡張伝道大会を催した。それは平壤では日韓人ともに参加した二五〇名の集会、京城では八〇〇名の集会と連日大盛況の伝道旅行であった。京城の第二夜の集会では四三名の決心者があって、ほかの集会を合わせれば九七名の決心者をえたのであった（明治四三・五・五）。そこで組合教会の朝鮮伝道論はその勢を増して行くばかりであった。そのような時に『新報』には「益富生」という記者の「朝鮮の基督教に対する大隈伯爵の意見」というインタビュー記事が載せられている。その最後において記者は朝鮮伝道は日本のキリスト者が希望する所であるが、朝鮮在住の日本人がかえって「悪感化」を及ぼしていると指摘している。そして「例令日本人の威力には柔順に服従するも彼等は日本人の人格には心服して居らず、一言以て之を曰へば日本人は未だ朝鮮人に対して伝道者としての信用を贏ち得ざる也。伯の賢慮如何」（明治四三・一〇・六）とたずねている。この質問の背後には、朝鮮伝道と言えば在朝鮮日本人を

相手にすべきであって、直接朝鮮人に伝道するまでにはまだ及ぶことができないという発想がひそんでいると言えよう。そしてそこには日本の植民地支配の政治のために、朝鮮は日本人の伝道にとってはかえって厳しい風土になっているという意識があった。いわば組合教会の朝鮮伝道にあったような、一種の樂觀論じみたものが、日基の意識的な人々の間にはなかったわけである。

一九一一年に本格的な朝鮮伝道を開始した組合教会は、一九一三年には朝鮮全国三八箇所教会を設立して会員約二、六〇〇余名を数えたと言う（大正二・八・一四）。『新報』はこのようなニュースを伝えて間もなく「組合教会の朝鮮伝道資金募集」という知らせを、つぎのような内容で報道した。

前号に報道せし如く組合教会にては朝鮮人伝道を拡張し教会外の有志に向つても広く其の資金を募集することに決せしが、『基督教世界』の報ずる所に由れば、其の募金委員長たる海老名弾正氏は主任者渡瀬常吉氏と共に非常の覚悟を以て此の事に当らるる決心なりと云ふ。而して其の寄附金は朝鮮総督府及び朝鮮銀行等の方面其の重なるものなるべしと伝ふるものあり（大正二・一〇・二三）。

『新報』に組合教会の朝鮮伝道に対する批判的な声が、一層明確な形

で反映されるのは、一九一九年の三・一独立運動を契機にしてであったように思われる。佐藤繁彦の「鮮人伝道の危機」(大正八・七・一七)という論説とそれに対する渡瀬常吉と組合教会常務理事大賀寿吉の「鮮人伝道の危機に就きての抗議」という投稿(大正八・七・三一)は、このような事情を端的に示している。佐藤は七月一日付の大阪朝日新聞に現れた「上海の陰謀団本部」という記事を取り上げた。それは「日本組合教会朝鮮伝道本部参事村上唯吉氏は上海に於ける朝鮮独立陰謀団の本部を探る種々なる材料を得て三十日朝郵船態野丸にて門司に帰来せり」。「氏は同船サロンにて事極めて重大なれば直ちに東上其筋に事情を具申する考なりと前提し憂色を漲らせつつ語る」という内容の記事であった。それは多分上海のフランス租界内に成立した大韓民国臨時政府に対する内偵行為に関するものであったのであろう。これに対して佐藤は「宗教家が探偵的行動を取るは如何なる動機にせよ唾棄すべきものと信ずる」と攻撃した。そしてこのようなことが起るのは、日本人の「鮮人伝道」関係者が、朝鮮にいる外国人宣教師とは異って朝鮮と朝鮮人を愛していないためであると告発した。

余輩は嘗て鮮人伝道に従事しつつある某氏に接したことがあるが、彼が組合教会の伝道者として不知不識鮮人に対する人格感情を失ひ鮮人を劣視し官吏が一般人民に臨むが如き態度ありはしないかを危ぶんだ

のである。憲兵や巡查は基督教を信ずるなら組合教会へ往けと鮮人を奨めて居るといふ噂もある。

この佐藤の文章に対して、渡瀬常吉は村上唯吉について、「同氏は朝鮮伝道部の参事には相違なきも参事なるものは単に主任の諮問機関に過ぎずして教務並に伝道上の責任を有するものに非ず」とし、あわせて村上が単なるレーマンであることを強調している。大賀寿吉は「当教会には朝鮮伝道本部なるものも、参事なる役目も無之又村上氏は当教会の役員にも、委員にも無之従て同氏の行動には当協会は何等の関係をも有し不申候」と抗議している。

佐藤繁彦の論説は、単に組合教会にからむ一つの事件に対する抗議に尽きるものではなかった。それは組合教会の朝鮮伝道そのものに対する告発であり、その伝道を支えた朝鮮同化主義に対する抗議から来るものであった。『新報』は「時事だより」の欄でアメリカの上院における発言を引用して、それこそ朝鮮統治の「同化主義を罵倒」している。「朝鮮人から日本人を製造する。恰も鮭の缶詰でも製する様に、日本の武士道に朝鮮人を詰め込んで朝鮮人から日本人を製造せうと云うのが日本人の朝鮮に於ける同化政策である」(大正八・九・四)とまで引用している。組合教会にとって、その朝鮮伝道に対するこのような日本におけるキリスト者たちの批判も、決して無視することのできないものであったであろう。

組合教会は一九一九年の三・一独立運動後も大々的な伝道を計画していたようであるが、一九二一年の秋、それまでに設立された朝鮮人教会を自自治の教会として「朝鮮会衆教会」と呼ぶことにした。そして朝鮮伝道部長渡瀬は朝鮮から撤収した（大正一〇・九・二二）。一九二一年一〇月、日本組合教会総会で渡瀬はこの撤収問題に対して「朝鮮に会衆派の起るのは、鮮人の燃ゆる希望の結果である」とのべ、このことについては斉藤総督も水野総監も賛成し、「未信徒の実業家なども君が手を引くのなら仕方がない。私たちは基督教に寄附して居たのではない。実際は全く君に寄附していたのであるから、斯うなれば致仕方もない」と言って同意してくれたと報告した（大正一〇・一〇・一三）。このような組合教会の朝鮮伝道に、日基の有力な指導者が批判的であったことは、意味深いことである。

日基のこうした姿勢はその独立伝道の福音的姿勢から来たことはもちろんである。このためにその指導者たち特に植村正久及び朝鮮在住の日基教会に属する教職者たちの姿勢も、その当時の状況からすれば、一般的に日韓併合の初期からすでに優れたものであった。植村正久は日韓併合を祝しながらも、深く「戒慎」するという態度であった。日韓併合直後の有名な論説「大日本の朝鮮」（明治四三・九・一）の最後の一節にあるつぎのような文章は、植村が日韓併合後の朝鮮をどのような観点から眺めようとしたかをよく現している。

「日本は所謂一個の異教的勢力として御幣を振り立て、神主の白衣を翻し、偶像祭の鼓吹者として、在朝鮮の外国宣教師及び其の下に在る幾萬の朝鮮人と触接せんとするか。日本の勢力は朝鮮の基督教と如何なる関係を有せんとするか。日本の教育制度及び其の施設は朝鮮の基督教を如何に待はんとするか。是は多くの我が国人が想像しつつあるよりも重大なる問題にして帝国の将来に深刻なる影響を及ぼすものなるべし」

植村は「帝国の威力は真によく新領土一千萬の人民を撫育し、最も健全なる方針に向って向上せしむるを得べきや」と憂え、「日本の勢力は自由を意味するか、將た弱者を奴隷視せんとするか」と問うた。植村は政治体制そのものを問うことはしなかったが、それに対する道義的な問いかけを忘れることはなかった。特に日韓併合の時には日本の勢力が、隆盛の道を行っている朝鮮の基督教をどのように取り扱うかに注目した。『新報』は朝鮮人の基督教信仰を支援することにおいてほとんど一貫している。一八九五年一〇月、日本の浪人たちが王宮に乱入して、王后閔妃を殺害した乙未事變の時、朝鮮在住のプロテスタント宣教師たちが王室を支援したことがあった（明治二九・一・一〇）。それ以来、日本の基督教の中でも在朝鮮外国宣教師の反日的傾向に対する

非難が起った。三・一独立運動の時に至ると、このような非難は、国内の世論になった感があった。これに対しても『新報』は一貫して宣教師たちを支援している。同じ信仰において宣教師であろうと、朝鮮人であろうと、日本人であろうと、異なることなく擁護されている。

このような立場から、植村は朝鮮のキリスト教に対する愛いをこめて、併合当初から日本の植民地政策に対して批判的にならざるをえなかった。『新報』を「発売及頒布禁止」の目に会わせた「朝鮮の基督教(一)」(明治四三・九・八)は、日本のキリスト教がその福音的生命を証した論説として誇りうるものであらう。植村はまず朝鮮における外国宣教師が間諜とまで言われる現実に触れ、熱心な朝鮮キリスト者を讃え、貧国にもかかわらず献金率の高いことを「信仰的に己を忘れて献身犠牲の精神を輝かせる事実」であると評価した。そして「朝鮮の基督者には排日思想を抱くものが多いという取り沙汰」に説き及んで、つぎのような感動的なことばを書き残した。

「朝鮮の基督者が国を憂ひ、独立を重んじ、他の威力に対して反抗するの氣勢を保つといふことが事実ならば……却って末頼母しく、後世恐るべしとでも云ふが適當であるまいか。敵の健気な振舞にも感服する日本の武士道から言っても、然うであらう。若し基督教の外国宣教師が朝鮮人民の間に属従的精神を鼓吹し、無暗に柔和しく、何でも

構はず太平無事の人民を養成したとするならば、是は日本人の氣象として決して感服することの出来ぬ始末である。……朝鮮の基督教徒の中に或る人々のいふ如き氣慨でもあるならば、当分此方には少しく不便ではあるが、末を楽んで歡迎すべきである。朝鮮八道せめては少数でも斯ういふ程の者無くして如何なるものか。我々は朝鮮の基督教を論ずる者に雅量乏しきを残念に思ふのである」

これは単なるキリスト教擁護にとどまる発言ではない。これはその當時としてなしうる、実に勇氣ある最大の政治的発言である。そして彼が一応日本の植民地支配を許している発言をなしたことは、このような勇氣ある発言をなすための、避けられない前提、またはレトリックであると考ええる。このような精神が日基に生きているならば朝鮮総督府の統治政策に乗って、同化政策をかざす朝鮮伝道などは考えられないことであつた。『新報』は一九一〇年、朝鮮において「百万人救霊運動」が起ると、「これが帝国の靈的運命を開閉すべき関であるかも知れぬ」(明治四三・九・二二)と言って、この運動を支持し、この運動に應えて在朝鮮日本人の伝道に力を合わせることを訴えている。こうして朝鮮において政治的、宗教的に悲劇的な状況が展開され、キリスト者たちの苦難が知らされると、『新報』を中心として日基は同じ信仰にある者としての苦しみと悩みを反芻したのであつた。



一九一一年、主として朝鮮のキリスト教勢力を弾圧するために、寺内総督暗殺未遂という罪目で民族指導者約七〇〇名が逮捕され、その中一〇五人に刑が言い渡された。この事件は「朝鮮陰謀事件」と呼ばれたが、韓国では一般に「一〇五人事件」と言われる。この事件に対して『新報』はまずこの裁判について日本の新聞には詳細に報道されていないことと被告たちを拷問にかけたことに抗議している（大正一・九・一二）。そしてこの事件が「証拠事実」が確かでないこと、無実な人々に長い間苦痛を与えたことなどを批判して行政権と司法権の關係について「大いに覚醒して議論すべき」であると論じている。論調はひかえめであるが、この事件が無実のものであることを十分ほめかしている。一九一五年、『新報』は出獄した、一〇五人事件におけるもっとも重要な人物であった尹致昊を訪ねて行ったインタビューの記事をのせている。その時、尹致昊はまた平岩、平沢、植村三氏と懇談を行っている（大正四・八・一二）。

併合直後には朝鮮の基督教青年会は、日本基督教青年会と同盟をなすべきであり、朝鮮の諸教会が「日本の諸教会と気脈を通じ、相協力」すべきであるという論議が日本のキリスト教会にはかなりあったもようである（大正一・一二・一五）。それは朝鮮のアメリカ宣教部が日本のアメリカ宣教部に属すべきであるという論議とともに進められた。これに対しては朝鮮にいるアメリカ宣教部側も批判的であった。朝鮮の基督教

青年会の内部では、これに対して反日感情による抵抗が強かった。このために日本のキリスト教会は「早く日本化せんとして猥りに朝鮮人諸教会に干渉するは、有害無益にして遂に其目的を達する能はざるに至らんのみ」（大正二・八・二八）と悟るようになった。このようなことは朝鮮の教会内のナショナリズムを日本の教会が理解し、それに対して慎重にならざるをえなかったことを示すものであろう。果たして、その後朝鮮キリスト教会の日本キリスト教会への制度的所属の問題は長い間、ほとんど論じられなくなった。

実際、日本の朝鮮統治は、植村正久が併合直後、「大日本の朝鮮」という論説において憂えたような道をそのまま歩んで行くようになった。そして朝鮮のキリスト教と衝突せざるをえなかった。一九一九年三一独立運動が起った時、植村正久は今まで懐いていた朝鮮統治への道義的期待が、完全に裏切られたと思わざるをえなかった。日本統治は明確に朝鮮のキリスト教に対して弾圧政策を取った。日本の大陸進出が文明の伝播であり、その文明が西洋文明であるという意味でキリスト教の発展とも連なるとあえて考えようとした明治期の日本キリスト教の幻想は、朝鮮においてまつ先に崩れて行くように見えた。一九一九年四月一五日、京畿道水原郡提岩里でメソヂスト教会に三〇名の人々を集められて焼打ちされた事件が知らされると、『新報』は「土耳其のアルメニヤに於ける暴政と擇ぶところなき」蛮行であるとそれを糾弾した（大正

八・五・一）。そして斎藤勇はそれを「或る殺戮事件」と題した憤りに満ちた一篇の詩にした。

この時分の『新報』を見れば、そこには日本統治の残忍さに対する憤りと朝鮮のキリスト者の苦しみに対する同情が溢れている。特に注目すべきことは、朝鮮にある日基の教会に属する教職者たちの発言である。

京城の秋月致牧師は提岩里の悲劇について、「教徒多数騒擾し憲兵警官行動解散を命ぜしも応ぜず却って反抗暴行せしかば発砲せしめ」と書かれている新聞記事を、「全然事実の真相を誤れるもの」とであると批判した投稿をしている（大正八・五・一）。

全羅北道、群山の日基教会、鈴木高志牧師は『新報』に「朝鮮の事変について」（大正八・五・八、五・一五）という長文の論説を寄せた。

彼はこの事件について実情が日本国内によく知られていないが、それは「我国民の理想、主義、品性の根本的革新を要求する一大暗示」であり、「実に国家的精神問題」とであると論じた。鈴木は「事実の真相」として、この示威は平和的なものであったが、日本人が残忍な仕打をしたと書いた。「大体は鮮人の方は至て平和手段、騒動したのは日本人という実情」であったと説明し、「私共は同胞の此大いなる罪惡の為め衣を割いて嘆く」と続けた。そして朝鮮における宣教師を「煽動者に擬してあらゆる邪推を逞ふし惡声を浴びせかけた」ことに対してはつぎのように述べた。

日本人には色眼鏡があります。官民共に宣教者精神なるものを理解して居りません。平生から彼等を本国政府の犬のやうにのみ見て居ます。日本人には国家以上の崇高なるものが無いものだから他人をも同じやふに見るのであります。

鈴木は排日思想は重大問題であると見なして「暴動は鎮圧すべし。鎮圧のできぬは朝鮮人の精神であります。彼等の排日思想であります」と書いている。そして排日思想の起源として、「歴史的対日輕侮の感情、倭寇に由れる悪感、豊大閣の征韓役に由れる悪感」という遠因と、「併合其物に対する反感、日本の主我的帝国主義への反動、政治的不満、経済的不安、社会的惡待遇の反感、日本人の道德に対する反感」という近因をあげた。鈴木はその中でも「日本人の主我的帝国主義への反動」をもっとも重要な原因にあげた。

影を惡む前に先づ自身を省みる必要があります。『国威を海外に輝かす』とか『大に版図を弘める』とか『世界を統一する』とかいうやうなことを日本の理想とし主義として進んで往った結果が隣近所、皆排日となって今日の八方塞を招いたのであります。朝鮮人と雖も人間であります。国民的自負心もあり国家的愛着心もあります。然るに

愛国心は日本人のみの専売特許の如くに心得、所謂『日本主義』で傍若無人に振舞へばいかで反動を起さで止みませう。

こうして侵略を讃える日本の教育を批判し、また在朝鮮日本人の不道徳を攻撃した。多分この論文はその当時、三・一独立運動について日本人によって書かれた論説の中でもっとも美しいものの一つであろう。それは日本キリスト者の良識と良心を証したものであった。『新報』には「朝鮮騷擾地巡回日誌」（大正八・七・二四、三一、八・七、一四）が「但し省略せる處多し」という但書をつけて発表されている。富士見町教会で語られた石坂亀治の「朝鮮騷擾の真相」（大正八・七・一〇）から「同情すべき朝鮮の婦人」という最後の一節を引用して紹介することにしよう。

私が諸所方々を巡回して見聞した間には、裸体にされて打たれたもの、または踏まれたもの、靴にて蹴られし老婆、鞭たれて腰に重傷を負へるもの、実に悲惨残酷なる実例を幾度か見たのである。私らに遇うたとき、此の忍び難き苦痛を日本の基督者に告げる事の出来たのは何より嬉しいと云って泣いたものもあった。

新聞も沈黙するか事実を曲げて伝える時、このようなキリスト者のか

細い声が、それでも伝えられたことは、信仰にあるわれわれの喜びであり誇りである。

### 結び

予定の紙数をはるかにこえているので多くのことを割愛しなければならない。『新報』は三・一独立運動後も朝鮮問題に注目している。時には「朝鮮の基督者をして日本基督教の健全にして進歩的な分子と握手し接触せしむる」こと（大正八・九・一一）を主張し、一九一九年八月にあった日本基督教全国信徒修養会では、つぎのような朝鮮問題に関する決議がなされたことも報道している。

- 一、吾人は朝鮮人同胞の政治上及社会に於ける自由の精神を尊重し將來朝鮮本位の政治を行ふに至らんことを切望す。
- 二、朝鮮に於ける基督教の伝道は政教分離の主義に基き且つ海外宣教師との協調を保つこと（大正八・九・一八）。

第二項の決議は暗に組合教会の伝道を批判したものであろう。このように日基が日本の大陸進出という政治的現実には逆えなくても、朝鮮の現実についてその事実を把握し、特に苦しむ朝鮮のキリスト者を理解して発言しえた理由はどこにあるであろうか。植村正久が日清戦争義戦論

から、朝鮮問題に関連して、反体制的批判の方向に発展したことは実に興味あることである。これは今後の研究にとって一つの課題になるべきであろう。少くとも日基の信仰理解、独立伝道の精神、キリスト者としての連帯感などは深く考慮されるべきであろう。何よりも朝鮮に在住した日基の教職者たちの間においてそれは顕著なものであった。その背後には朝鮮の教会の教職者や外国宣教師たちとの交流、朝鮮の栄える教会とその信徒の献身的な信仰に対する理解があった。植村正久は朝鮮に渡った時には、必ず朝鮮の教職者たちと交り、朝鮮の教会の在り方に感動しまた同情した。

日基の中、またはその指導者の間に、朝鮮同化主義を唱え、そのような伝道論を三・一独立運動前後においてすら唱え続ける人々がいなかったのではない。三・一独立運動においても官憲側に同調した投稿もある。しかし『新報』の主要な方向は、朝鮮のキリスト者との連帯に向いていた。それは日清戦争義戦論の時とは余程距離の遠いものであった。そこには日本キリスト教の思想的成長があったとも言えよう。そのような姿勢が、その後の歴史においてどのような過程を踏むようになるであろうか。果たして、植村正久はその後の日本教会史の中でどのようにに継承されたのであろうか。日本の国内の政治体制が固められて行くにつれて、体制批判の人々は沈黙するか挫折したであろう。そして体制を全面的に支持する人々が、教会の前面に立って教会を指導するようになった

のかも知れない。そして植村正久の、福音に立つそれこそやむにやまれぬ体制批判、キリスト教的連帯の信仰も、消えて行ったかも知れない。そうなると日韓併合以来一九二〇年代初期に至るまで、日基が保とうとした対朝鮮姿勢も崩れて行かざるをえなかったであろう。しかし信仰において朝鮮のキリスト者と悩みを分かちあったキリスト者少数の伝統は、決して日本のキリスト教から消え去ったのではないと思う。それは日本国内におけるキリスト者の苦しみが増して行く過程の中で、ただ潜行していたのであろう。私は『福音新報』を通してこのような日本のキリスト教に触れることができたことを嬉しく思う。

## 注

- 1 植村正久の筆名については、山梨大学の内三郎教授の教示を仰いだ。T・TOMという筆者は植村のペンネームと見てあまり間違いはないであろうというお話であった。私もこの論説の内容からそのように思う。
- 2 『新報』明治三十八年五月四日号、一五頁参照。三三、〇八四人の中、男二〇、七一六人、女一二、三七一人であった。この日本人人口が明治三十九年六月末現在では七二、五三九人に増加している（『新報』明治四〇年八月二三日号、一四頁参照）
- 3 『新報』明治三十八年二月二八日号、一四一―一五頁参照。貴山幸次郎は満韓巡回の報告の中で大邱について、「韓人の此地に住するものは他に対して教育あるもの多く顧ふに韓人の伝道は此所を中心として着手せらるるに至らんか」と言っている。
- 4 『新報』大正五年四月二七日号、一四頁参照。日基の朝鮮中会が成立したのは一九一五年八月三日であった。『新報』大正四年八月一九日号、一三頁参照